The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	鉢叩きの狂言について
Author(s)	黒木, 祥子
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 1975, 9, p. 1-16
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/47727
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

鉢叩きの狂言について

黒木祥子

一

現行大蔵流狂言に、「福部の神（フクベシン）」という曲がある。都の鉢叩きたちが誘い合せて北野天神の末社、福部の神へ参詣すると、福部の神が影向して彼らの富貴を約束しつつ歌い舞うというのがその梗概である。これに「勤入（ツトメイリ）」という替の型があり、その場合は鉢叩きたちが社前で踊念仏―勤め―を奉納する場面が入る。現在ではこの型での上演がほとんどだそうである。この曲は、現行の和泉流では「鉢叩」の名で呼ばれ、通常の型で踊念仏が入っているが、その歌詞と音楽は大蔵流のものとは異っている。その他にもセリフの出入や、大蔵流にある神酒をすすめる場面が和泉流にはないといった違いがある。

また、和泉流にはもう一つ鉢叩きを扱った現行曲が存在する。曲名は「瓢の神（フクベシン）」で、音だけは大蔵流に同じである。生活に窮した鉢叩きの太郎が、都へ上って別な職につこうと思い立ち、氏神の松尾明神へ暇乞いかたがた幸いを願って通夜をする。と、明神の末社、瓢の神が現れて、夢中の体で鉢叩きを続けるように告げ、瓢と衣を授ける。目覚め

た太郎は転職を断念し、噂を聞いて駆けつけた仲間の鉢叩きと共にお礼に踊念仏を奉納するという筋である。踊念仏の詞章は、先の大蔵流「福部の神」のものと一致する。

鉢叩きを扱った現行狂言は、以上二種存在するが、鉢叩きとフクベの神の取合せや、鉢叩きの踊念仏の趣向が共通するばかりでなく、和泉流の二曲の間には一致するセリフまである。特に鉢叩きの踊念仏の部分は、台本上でも舞台上でも大きな部分を占めるばかりでなく、立衆が多勢で瓢箪や証鼓を叩きながら歌い回る賑やかさと異様さが観客の目を引きつけ、この部分がヤマになっている。踊念仏の詞章（以下鉢叩歌と略す）は異っていても同じ形態の芸を中心にしている両曲は、そのために似通った印象を与える。さらに両流の間での曲名や鉢叩歌の異同をみると、両曲の間には複雑な影響関係が存在するように思える。この類似した二狂言の原形と相互の関連を探ってみたい。

二

まず大蔵流「福部の神」・和泉流「鉢叩」の方から検討してみよう。この狂言は、参詣人の前に現れた神が「汝らを富貴栄華に栄えさしようぞ」と約束し、「なお行末を守らんと、わが社にこそ納まりけれ」と舞い納める福神物狂言である。立衆も「めでたい御代でござれば、いずれもを伴い囃子物にて」登場しており、全体に長閑な祝言の気分があふれている。（以上引用は古典大系、大蔵流）[1]

しかし、福神物の狂言では、ヤマはキリの福神の歌舞で、それを行う福神がシテとなるのが普通である。この曲では前述したように鉢叩きの法楽がヤマとなり、シテも鉢叩きの中の一人になっている。特に現行和泉流では、フクベの神は、鉢叩きの長い法楽が終り一セイで登場すると、すぐに立衆の歌うキリ謡にのって舞を舞う。その方が一曲と

してのまとまりはよいが、福神の役は非常に軽い。それに比べると大蔵流の法楽のない通常の型では、フクベの神がシテとなり、ヤマもキリの部分になって福神物としての形式にあっている。そうしてこの狂言の最古の記載例である大蔵虎明本「脇狂言之類」も、曲名は「はちたゝき」であるが、現行大蔵流の鉢叩歌のない型をとっている。[2] この形式の方が本来の姿ではないだろうか。

ところが、鉢叩歌のない場合にも、この狂言には福神物狂言として不都合が生じる。一般に福神の影向には、そのきっかけとなるような参詣人からの働きかけを必要とする。神の名を詠込んだ連歌をする（大黒連歌）、囃子物を催す（松脂）、豆を打つ（福の神）、論争する（筒竹筒）などのさまざまな趣向である。鉢叩歌はちょうどその場面にあたる位置に存在しているからである。

しかし、鉢叩歌の内容は、大蔵流は鉢叩きの境涯を歌った剽軽なもの、和泉流は無常を歌った道歌風の陰気なもので、前者にはわずかに瓢（フクベ）や瓢簞の語が見うけられるが、いずれもフクベの神を歌うものではない。また、影向した神は参詣人の法楽に対してほめたり判定を下したりするのが普通であるが、フクベの神はあの長大な法楽に対して何もふれることがない。鉢叩歌は、神を感応させ呼び出す役割をしていないようである。

特に大蔵流では現行でも、影向したフクベの神は鉢叩きに対し「この上は謡い舞うて瓢の神を慰め候へ」と法楽を催促し、鉢叩きの方も「いでいでさらば謡い舞うて、瓢の神をすずしめん」と応じており、前の法楽の鉢叩歌の存在を考えておらず、ここで初めて法楽をなすていなのである。そうしてこれはキリ謡の部分と重なるのである。

法楽に鉢叩きの芸の趣向を用いるのは当然考えられることであるが、実際虎明本ではすぐあとのキリ謡の部分に「いろはちたゝきぶし」という節の指定をしている。鉢叩き節で歌われるキリ謡にのって、鉢叩きにいつも叩かれている

瓢箪の精が自ら舞うという趣向である。福神の歌舞という福神物狂言の持つ構造的趣向と、登場人物である鉢叩きの芸の趣向とが同時に演じられている。キリの部分は二重の意味でヤマとなっていたのである。

現行では両流ともキリは普通の謡いであり、鉢叩きの芸の趣向は独立して神の影向前の法楽の場面を形成している。現行大蔵流では、もとの福神物狂言の構造をそのままに鉢叩歌を入れているため、全体が二分される気味がある。現行和泉流では、影向後の場面を大幅に省略し、鉢叩歌の締め繰りのようにしてフクベの神の舞がある。大蔵流が替の型として、鉢叩歌を筋立から独立した要素として扱っているのに対し、和泉流の方は本文の中に取り入れただけでなく、それを中心的な趣向にして全体を統一している。現行和泉流の形の方が新しい形とみてよいであろう。

元来この狂言は、フクベの神の影向を眼目として成立した福神物狂言だったのであるが、後に神を呼び出すための趣向として鉢叩の法楽を取り入れ、結局この部分が全体の構想にまさってしまったと考えられる。

三

それでは現行和泉流の「瓢の神（フクベシン）」の方はどうであろうか。この狂言は和泉流独自のものらしく、しかも文政末期の成立と思われる雲形本までしか遡れないようである。

この狂言にも瓢の神が登場し、瓢や衣といった一種の御福を授けるが、この狂言も福神物の狂言と言えるだろうか。鉢叩きの参詣する松尾明神は、「氏の神」（古典文庫）、あるいは「我が宗体の守護神」（狂言集成）で、瓢の神はその末社という設定である。が、一般に福神物の狂言では、参詣人と神との間にこのような特別な関係が設定されることはない。また、狂言集成本では「抑これは松尾の末社瓢の神とは我が事なり」と、福神らしい一セイで登場する瓢の神も、古

典文庫本では普通に出てきて「か様にさふらふ者は　当社松の尾の明神の末社、瓢の神にてさふらふ」と名乗っている。さらに登場してからも、眠っている参詣人の夢枕に立つ形をとり、両者の間にやりとりのないことや、神が途中で退場してキリに神の歌舞がないというのも福神物の型にあてはまらない。

松尾明神の末社に瓢の神というのは狂言らしい創作であろうが、明神が鉢叩きの氏神であることはかなり知られていたようである。[3] 天明二年に刊行された「空也上人絵詞伝」は、それまでの空也伝説の集大成とでも言うべきもので、序文によれば、原本は青蓮院宮尊証親王（一六五一～一六九四）はじめ多くの公家達の筆になる詞書に、海北友雪（一五九〇～一六七七）が図絵したものである。それには、空也上人が年来法華経読誦の時着けていた衣を松尾明神へ奉ったという「百座法談聞書抄」以来多くの説話集に見える説話を、六斎念仏の起源伝説として載せている。明神は衣の返礼に「御前の鰐口と太鼓を布施に上人にあたへ　末世の衆生利益の為に　此太鼓をたゝき　念仏をすゝめ玉ふへし　此報謝には上人念仏あらんかぎりは　影の形にしたかふことく　守護し申さん」と誓い、それより毎年神前で六斎念仏を勤めるようになったというのである。

この狂言は、そういう空也堂の縁起をふまえて、空也上人の「遺弟に連な」（狂言集成）る鉢叩きを、松尾明神が誓いどおりに「富貴になる様に守ってとらせ」（古典文庫）、あるいは「宗旨繁昌にお守りあ」（狂言集成）るという筋書である。従ってこの狂言は一般的な祝言の曲ではなく、鉢叩きの念仏行と松尾明神の霊験譚とでも言えるような、全く真面目なものである。そうして、最後の踊念仏の形態も、その発祥の地、松尾社頭の六斎念仏を模したものではないだろうか。もっとも、松尾社では現在は行なわれていないようである。しかし、空也堂での踊念仏は、「住持一人、伴僧二人、此三人は僧なり、此外に有髪の俗四人法衣を著て、胸に鉦鼓をかけ、左右に立向て、同音に文句を和し、鉦鼓をなら

す、住持は文句をとなふる計なり、伴僧二人手にて瓢箪を叩き文句を和し、終には互に踊り出て、前後入違ひ、勢ひ込みてなす」(譚海)もので、現在のは狂言ほど賑やかではないが、形式はよく似ている。

ところで、この狂言の鉢叩歌は、同流の「鉢叩」のものとは別で、大蔵流の「福部の神(勤入)」と同じく、剽軽な鉢叩きの境遇を歌ったものである。もちろん現在空也堂で使っている和讃ではなく、また狂言の筋立てとも関連は見られない。狂言集成では、鉢叩歌のあとに「神の恵の深ければ　輪廻の迷ひ振捨て　元の寺にぞ帰りける　これぞ偏に我が頼む　元祖空也の御誓ひ　法の力ぞ有難き〳〵」という謡がついてトメになっており、筋立と呼応して霊験譚としての姿勢を一貫させようとしている。しかしこれも新しく加えられたものらしく、古典文庫本のトメは鉢叩歌の最後「なもた　はるひた　はつぱいと　茶筌」のかけ声で「一同に正面向一同に片膝つき止る」演出になっている。鉢叩歌の部分は筋立から遊離していて、霊験譚的な筋立てが真面目に展開し終ると、一転して陽気で滑稽な鉢叩歌になってそのまま終了してしまうのである。しかし、この狂言が六斎念仏の起源伝説を背景にしているのならば、最後にその芸能を置くのは当然である。また立衆もこの踊念仏のためにだけ登場しているのであり、(4)かえって踊念仏を演じるために構成された筋立てとも考えられないであろうか。

四

ところで、現行曲ではないが、やはり鉢叩きを扱った狂言が古台本に見られる。一つは天正狂言本の「八房」、もう一つは虎明本「万集類」の「はちたゝき」、最後は和泉家古本「六議」の「匏神(フクベノシン)」である。これらの諸本は流派も成立年代もかなり異り、直接の継承関係は考えられない。また内容もかなり異っているので、三本の間の異同から検討

しよう。

まず天正本であるが、曲名の「八房」は鉢坊のあて字で、鉢叩きのことである。二人の鉢叩きが清水寺で籠り合い、「侍になりたき」と祈請すると、一人には瓢と餌袋、もう一人には差笠と瓢が授けられる。そこへ登場した夢解きに御福の意味を占わせると、「鉢坊になりて暮せ」ということだと解く。二人は「もつとも」と法楽に踊念仏をする。以上がその梗概である。

和泉家古本は、その前半だけが天正本とほとんど一致する。後半は、二章で扱った福神物の鉢叩きの狂言になっているのである。前半部を天正本と比較してみると、清水寺へ参詣する鉢叩きの人数は一人になっている。そうして彼の願いは「大名になりた」いのでもあるが、「これ(鉢叩)をやめたのしうなるやうに」と富貴の方へ傾いているようである。次に御福とその授かり方であるが、まず打出の小槌を意味する太鼓の撥が後見によって側に置かれる。それを「宝ノツチ狂言ノゴトク」に振って、からかさと瓢箪を打ち出す—これも後見がわきの方より出す—趣向になっている。天正本に比べると、趣向が多くなっているが、いかにも宝物が出てくるように期待させて、次に出てくる物の意外さと卑小さを際だたせ、滑稽感を高める。が、それだけではなく、呪文を唱えながら槌を振うさまは、祝言的気分を持たせる意味もあるであろう。次に御福をあわせる場面では、御福を持って立った自分の姿を見て「もとのはちたゝきになつた」と気づくことになっている。天正本の夢解きの登場がなくなっているのだが、天正本でも御福の品だけでその意味する所は一目瞭然であろう。当時の寺社の参籠風俗を写していたのであろうが、省かれても当然な場面であろう。要するに、ここまでの変化は、近世的な発展と言うことができる。天正本からの飛躍的な変化は、最後の法楽がなくなって、北野社へ参詣することである。

大蔵虎明本「万集類」の「はちたゝき」は「脇狂言之類」にある同名の曲とは全く別の狂言である。多くの歌謡と語りだけの抜書であって、具体的な構成は不明であるが、天正本や和泉家古本と比較すると、その輪郭が浮びあがってくる。はっきりしていることは、鉢叩きが清水寺へ参詣すること。そこで法楽をすること。トメが「南無や大悲の音羽山　我身一つはもとの木阿弥　ああしなりたりや茶筅〳〵」であって、失敗に終っていることである。

このように社寺に参籠して御福を授かることは「御利生あらた」(和泉家古本)なはずであるが、この場合はどうであろう。彼らの授かった御福は、鉢叩き以外のものになりたいという彼らの願望を拒絶するものである。しかも鉢叩きでは貧窮から脱出できるはずはない。それに対して、鉢叩きの方も心から納得したわけではない。天正本の法楽の終り近く「思へばうき世は夢の間よ　聖衆来迎急いで浄土を願ふべし」と悟ったように歌いながら、次には「干菜蕪に花の咲くまで　とつこ(頓悟か)せぬこそめでたけれ」と続けているのは、解脱などするものかといった気分が伺えないだろうか。「万集類」の「あゝしなりたりや」のトメも諦めきれない気分である。和泉家古本では「是非もない事かな」と諦めながら、なおも「此上は是よりすぐにふくへの神へ参り　此鉢叩きにて楽しうなるやうに祈りをかけ」ようと北野社へ参詣するのであるから、少しも欲を離れていない。和泉家古本の構成には問題があるが、やはり本来「茶筅一瓢鉦を叩き、衆生の煩悩の眠りを覚し無常念仏を勧め」(空也上人絵詞伝)るはずでありながら、煩悩から離れられない鉢叩きを揶揄する筋立てだったのではないだろうか。鉢叩きは半僧半俗ではあるが、貪欲な僧の失敗を笑う出家狂言の類の滑稽とみられないだろうか。あるいは現世利益の験仏者、清水寺の観音も幾分その霊験をからかわれているのかもしれない。

天正本や「万集類」では、清水寺の境内で踊念仏を行うのであるが、清水寺のような参詣人の多い寺社には、参詣

人の喜捨めあてに種々の乞食芸人が集って、芸を競いあっていた。中世以後の絵巻や風俗画の類には、その風景が数々描写されている。それらの中で、「融通念仏縁起」や上杉家本洛中洛外図などには、二人組の鉢叩きが社寺の門前で、見物人の喜捨の銭らしいものの見える筵を前に、瓢箪を叩き歌っている姿が見える。特に後者の姿は、「七十一番職人歌合」にある鉢叩きの姿によく似ているが、それらは大乗院寺社雑事記に七道者の一として、またロドリゲス大文典には七乞食の一として見えるような乞食乞人である。天正本の二人で行う踊念仏、また御福の餌袋・差笠、あるいは和泉家古本のからかさも、彼らがこういった乞食芸人であることを示すものではないだろうか。その芸態も、「二人三人つれてもうたひ　かけ合ても諷」（風俗文選「鉢扣辞」）う自由な演技だったのではないだろうか。こういう風景を、祈願のかなった時に奉納する法楽の芸にとりなして形成された筋立てではないだろうか。

和泉家古本では、この法楽の代りに、北野社でフクベの神が影向する場面がつく。そこをみると、影向前の鉢叩きの法楽はなく、影向したフクベの神と鉢叩きたちとの間のやりとりは「福ノ神ト同前」であるから、神酒を進める場面もあったらしく、虎明本「脇狂言之類」の「はちたゝき」とほぼ同じである。あるいはこのような、清水から北野へ行く筋が古く存在したとも考えられる。しかし、前半は天正本よりはるかに近世的に発展した形であり、後半も虎明本以上に福神物としての類型化が進んでいる。全体構想だけが天正本より古い形を残していると考えるのも無理なようである。和泉家古本に先行する天理本に、この曲のみ記載がないのも、何らかの意味でこれが新曲であるのを示しているのではないだろうか。(5)

この狂言の眼目は鉢叩きの法楽である。実際の鉢叩きが歌っていた歓喜踊躍和讃の一部、「思へば浮世は程もなし　栄華は皆是春の夢　名利の心をとどめて　急いで浄土を願ふべし」を変形した詞章を法楽の終り近くに置き、それが

一応この狂言の結論にもなっている。

五

現行和泉流の「瓢の神」の曲と、天正本「八房」系統の曲とでは共通点が多い。共に貧しい鉢叩きが神仏に鉢叩き以外の職について豊かに暮したいと祈請し、それに対する御福も、もとの鉢叩きになれという意味のものである。異なるのは、参詣する場所と瓢の神の趣向の有無、法楽の形態である。そうしてこれらの違いは、結局すべてこの二狂言の主題の違い―一方は空也伝説に基く霊験譚であり、一方は欲を捨てられない念仏行者の滑稽譚である―に関連している。

この二系統の狂言の主題の違いを端的に表わしているのは、瓢の神の趣向の有無、つまり御福の授け方の違いである。同じ内容の御告げ・御福でも、それを瓢の神が登場して「次第に富貴になる様に守つてとらせうとのお事ちや」（古典文庫）と授ける場合と、後見が「なけ出す」（天正本）場合とでは、その意味合が全く異ってくる。前者ならば福神物の類型に属するが、後者も一つの類型と言うことができる。それは、参籠して仮眠している参詣人に夢告や御福が授かるという狂言が幾つかあげられるからである。いずれも神や神の使いが出るのではなく、後見が出したり、目覚めた参詣人のセリフで知らせたりする。天正本には「いぐゐ」・「いもぢ関」・「ごせさたう」などがあるが、虎明本などではもっと多い。その多くは妻乞いの祈願で、そのためか妻観音と言われる清水寺がよく舞台になる。その御福や御告げは、参詣人にとってうまくいく場合（「清水座頭」）もあれば、失敗の場合（「二九十八」「吹取」「釣針」）もある。しかし、「居杭」や「伊文字」が端的に示すように、御福や御告げを授かること自体よりも、それによってまきおこされる騒

動の方に眼目をおいているのである。だからその御福が常にありがたいものであるとは限らない。天正本の御福はこの系統に属するものである。

ところで、もう一度松尾社の瓢の神の登場する場面をふりかえってみると、この場面は参詣人にとっては夢の中の場面である。結局通夜をしている間に授かった御告と御福なのであるから、普通ならばこのすぐあとの「はあ〳〵あら有難や　暫く睡眠のうちにあらたな御霊夢を蒙つた云々」（狂言集成）というセリフだけですまされる場面である。御福の内容からしても、天正本のような形が自然である。この瓢の神は、御福を授かること自体を霊験として強調するために登場させられたものと考えられる。

そうして、この瓢の神の趣向そのものは、北野の末社フクベの神から取り入れたものではないだろうか。天正本では鉢叩きの身で富貴栄華に栄えるなどとは夢にも思っていなかったに違いない。ところが和泉家古本では「鉢叩きにて楽しうなるやう」にと、清水寺から北野の末社フクベの神へ出かけ、そこでフクベの神が影向してやっと彼の願いはかなうのである。このような段階を経て、最初の御福そのものを有難いものと見なして、そこで瓢の神を登場させる狂言が成立したと思われる。参籠先を北野や清水にせずに、松尾にしたのは、周知の空也伝説を使ってこの狂言を一層霊験譚的にするためであろう。法楽の踊念仏の芸態が、天正本の二人のかけあい程度の乞食芸から、立衆を必要とする整然とした法式に変わっているのも、他の変化と軌を一にするものであろう。

結局この松尾へ参詣する鉢叩きの狂言は、清水へ参詣する狂言の筋立てをとりながら、その滑稽としての見方を捨て、福神物の北野へ参詣する狂言の祝言の態度を取って成立したのである。その間を埋めるのに空也伝説を用いたために、霊験譚的な真面目な気分を持つに至ったのではないだろうか。

この松尾社の「瓢の神」は、天正本「八房」とはよほど性格が異なってきているが、それには天正本が乞食芸人の芸と風俗を写すことを眼目としていたため、そのままでは江戸時代の狂言として存続しにくかったという事情が考えられないだろうか。虎明本「万集類」の「はちたゝき」が、非常に多くの歌謡と語りで彩られているのは、この狂言を存続させるための一つの試みだったのではないだろうか。また和泉家古本も同じで、松尾へ行く曲はそれらの試みの定着した形と考えられる。

六

鉢叩きの狂言の原初的なものとしては、フクベの神の影向を趣向とする北野社へ参詣するものと、鉢叩きの踊念仏を趣向とした清水寺へ行くものの二種があった。各々一つの趣向のみで構成された単純な狂言であったが、両方の趣向を兼ね持つ一曲に統一する動きがおこった。大蔵流では、北野系の福神物狂言の筋立ての中に踊念仏を入れ、和泉流では踊念仏を曲の最後に法楽として置く清水系の筋立てにフクベの神の影向を取り入れた。和泉流には大蔵流と同じ系統の曲もあるが、これは弟子家系統の台本のみにあり、他流からかあるいは間狂言から取り入れたものと思われる。宗家系統の本狂言としては「瓢神」系統の曲だけである。こうして成立した二曲は、共に福神物的祝言性を持ち、鉢叩きの法楽をヤマとする、非常に似通った曲になってしまった。

ところで、フクベの神は瓢箪の神を意味しているが、松尾明神の末社の場合と北野天神の末社の場合とは幾分違いがある。松尾明神の末社にはフクベの神は実在せず、これは鉢叩きの採物の瓢箪—あるいは酒の神でもある松尾明神とも結びつくか—を神格化したものである。松尾明神が鉢叩きの氏神であるから、この瓢箪の神が明神と鉢叩きの間

をとり持つのは問題はない。一方、北野天神には福部神―あるいは富部神―という末社が実在する。そうしてこの狂言のフクベの神がこの神をあてていることは、大蔵流のこの神の一セイが紅梅殿の神となっていることからも明らかである。この末社の歴史は古く、「北野天神縁起」などにも、天神の託宣に「わが従者に老松富部といふ二人あり。笏をは老松にもたせ舎利をは富部にもたせたり。これらは鎮西より我ともにきたる者也　この二人ははなはた不調のものともそ　心ゆるしなせそ　わかゐたる左右にをいたれ」とあり、老松と並ぶ北野第一の末社である。天神の眷属はたいてい障害神であるが、特にこの二神は荒ぶる神だったのであろう。ところが、この老松が文字通り松のことと思われるようになると、飛梅の伝説と結びついて老松紅梅の配合になり、一般には「ふくべの神はこうばい殿を申也」（虎明本）と解釈されて紅梅殿の名の方が有名であった。従って祭神はよくわからないが、大黒や毘沙門のような福の神としての一般的な人気はなかったようである。また鉢叩きが特別に帰依していたということも知らない。単に福部と瓢の語呂合せから、この狂言で鉢叩きと結びつけられたように思える。空也の時代は、まだ天神信仰の盛んになる前のようで、空也と北野天神との関係はないようである。故に鉢叩きの神としての瓢箪の神を出すには、北野天神を選ぶ必然性はあまりないと思われる。この狂言が「当社天神の末社」[6]（虎明本）の影向を目的としているのは、この狂言が「輪蔵の間にもする」（虎明本）ためであろう。

「輪蔵」は、観世弥次郎長俊（一四八八～一五四二）の作で、北野社の輪蔵を回転させる行事の霊験を讃美した曲である。後段は、五千余巻の経を一夜に拝みたいという僧の願いがかなえられ、結縁に蔵経の守護神ともに輪蔵を回らして舞うのである。狂言では半僧半俗の鉢叩きが富貴を約束してもらい、神が鉢叩念仏で舞う。構成に幾分類似した点がある。

また虎明本の注には「さきへ出たる間」というのがあり、間狂言として意識しているように思える。さらにこの狂

言は、両流ともに本狂言の台本には少く、間狂言の台本にはかなり記載されている。以上からこの狂言は「輪蔵」の間狂言として成立したと思われる。もっとも「輪蔵」成立当初からの間狂言であったかどうかは不明である。末社間が、福神物の狂言となったと考えれば、この狂言に神を呼び出す場面がなく小規模な狂言であることも当然と考えられないだろうか。

「匏神（フクベノシン）」の曲名は、和泉家古本が、清水系統の狂言の後に北野天神の末社瓢の神の影向する曲を付けた曲に名付けて以来、和泉流では続けて用いられている。一方「ハチタヽキ」の曲名は古く、寛正五年の糺河原勧進猿楽日記に見える。この日記によると、「ハチタヽキ」は初日の四番目に演じられている。この曲目中で、虎明本で脇狂言之類に入れているものは、「三ノ丸長者」・「カクレミノ」・「三本柱」と「ハチタヽキ」である。このうち「三ノ丸長者」は初日の初番、「三本柱」は三日目の初番になっている。そうして「カクレミノ」は異本に「カクレガサ」となっており、虎明本では「隠笠」を指すと思われる。この狂言は、宝買いに行った太郎冠者がすっぱにだまされてインチキな物を買い、主に追い入にされる狂言で、この曲が脇狂言とされるようになったのは近世になってからである。[7] また、二日目の初番は「ヒケカイタテ」で、現行「髭櫓」と考えられる。虎明本では女狂言になっているが、多勢の立衆が出て謡仕立で戦闘場面を演じる。それで初番へ置かれたと思われる。以上からこの番組には、初番を祝言の曲にする意識が存在すると考えてよい。また、この番組中には福神物と思われる曲が見あたらない。この「ハチタヽキ」が、虎明本「脇狂言之類」のこの曲であったら、当然初番に置かれていたであろう。この時に演じられたのは「昼不着笠夜不菌　東西南北自由身　一瓢扣畢有何益　花発十方浄土春」（一休鉢扣賛）というような鉢叩きの境遇と、その芸を主題にした狂言だったのではないだろうか。天正本のような筋立てであったか否かは不明であるが、フクベの神の趣向よ

り、鉢叩きの芸の趣向を中心にした狂言の方が古いのではと思うのである。

注

（1）ここで引用した諸台本の流派と書写年代を次にあげる。猶引用文には適宜漢字をあて句切りをつけた。

大蔵流
　虎明本　　寛永十九年成立
　古典大系本　現行大蔵流台本とみなす
和泉流
　和泉家古本　承応―元禄頃書写、和泉流三代目道甫本（日本庶民文化史料集成、「狂言」池田広司氏解説）
　古典文庫本　天保十四年頃書写
　狂言集成本　慶応元年書写
他
　天正狂言本　天正六年奥書

（2）大蔵虎明本「万集類」には、同じ曲名のもとに現行大蔵流の鉢叩歌と歌い出しの同じ歌謡と語りが記されている。しかしこれは一まとまりの鉢叩歌ではなく、一の曲の次第や道行などの各部分の抜書である。この曲については第四章でふれる。

（3）たとえば「宝永花洛細見図」の極楽寺の図には、境内に勧請したらしい松尾大明神の小祠がある。

（4）虎明本の立衆は、キリで地謡の役をする。

（5）和泉家古本の書誌については、池田広司氏が「古狂言台本の発達に関しての書誌的研究」で詳細に解説しておられる。「匏神」の記載の形式は他とかなり異っており、池田氏も「追加曲」とされている。が、著者の追加か、後人の手になるものかふれておられない。また「抜書」の「福神」にある「享保五年子三月廿五日云々」の書入れなどはどう処理しておられるのであろうか。

（6）現行大蔵流の福部の神の扮装は、女神の体で面は乙。紅梅殿の神というので女と考えたのか。現行和泉流の場合は普通の末社で、登髭あるいは夷の面、子方の場合もある。

（7）北川忠彦「狂言の祝言性」文学語学、昭和36年9月

（文学部助手）